日本 PF 学会課題研究委員会（広島地区）　2012. 3. 20（火）於：広島大学東千田キャンパス

子育て思想への歴史的まなざし（２）

—地縁・血縁に代わる家庭的共同体は構築できるのか—

鈴木由美子

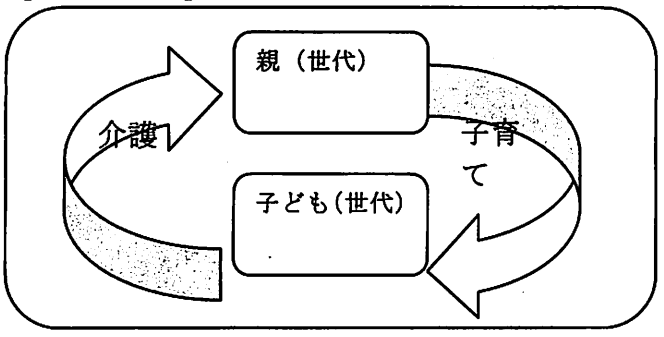
Ⅰ．前回のまとめから

（１）子育て論は、社会との関連で捉えられる必要がある。

（２）子育ての目的は、親子のかかわりという狭い関係においてではなく、広い社会関係という空間軸、永遠性という時間軸において捉える必要がある。

（３）子育てを核とした、新しい社会関係構築の可能性を探ることができるのではないか。
　　＝地縁・血縁ではない家庭的共同体構築の可能性

【イメージ図】



Ⅱ．本時の発表

子育てを核とした新しい社会関係構築において、中心となる価値は何か
（以下、科研により現在進めている研究を中心に説明する。）

１．価値についての予備調査の結果

（以下、「道徳授業用の読み物教材に含まれる価値項目の分析」（鈴木由美子、永瀬美帆、藤橋智子、今永泰生、江玉睦美、松田芳明、宮里智恵、椋木香子、森川敦子）広島大学大学院教育学研究科学習開発学講座『学習開発学研究』第４号、2011 年、pp. 57-65、参照）

（１）小・中学生における「価値」という語の理解や使用の実態

回答者のうちわけ

小学生：4 年生 73 名、5 年生 77 名、6 年生 76 名の計 226 名（男子 117 名、女子 108 名、不明 1 名）。中学生：1 年生 82 名、2 年生 79 名、3 年生 80 名の計 241 名（男子 116 名、女子 124 名、不明 1 名）。大学生：教育学部の 1 年生 43 名（男子 25 名、女子 18 名）。大人：小・中学校の教員 23 名（男性 14 名、女性 8 名、不明 1 名）。

１）小・中学生における「価値」という語との接触と使用

表１　「価値」という語を見聞きしたり使ったりした経験の有無(() 内は%)

		有り	無し
小学生	使った経験	75 人　(34.9)	140 人　(65.1)
	見聞きした経験	127 人　(57.5)	94 人　(42.5)
中学生	使った経験	105 人　(45.3)	127 人　(54.7)
	見聞きした経験	170 人　(70.8)	70 人　(29.2)

注：合計人数が異なるのは、それぞれ無回答者を除いたためである。

表２　「価値」という語の言い換え例

カテゴリー		頻度(%)
大切：	「大切なもの」「大切なこと」など	8　(29.6)
意味：	「意味がある」「大事な意味がある」など	4　(14.8)
ねうち：	「ねうち」「ねうちのあることだよ」など	3　(11.1)
宝：	「宝」など	2　(7.4)
ものさし：	「心のものさし」など	2　(7.4)
その他：	(1 件ずつの回答)	8　(29.6)

注：大人 23 名中 16 名が回答し、そのうち 1 名は言い換えたことがないと回答したため、15 名分の回答から得られた 27 の用例を分類した。

2)「価値」についての理解とその変遷

表 3-1　「価値」イメージの 5 位までの総数および各カテゴリーとその頻度

	5 位までの総数（%）	5 位までの各カテゴリーとその頻度（%）					
小学生	145 (33.3)	高価な物・高級品 44 (10.1)	お金 36 (8.3)	希少な物・貴重な物 22 (5.1)	大切なもの 22 (5.1)	高価・高級であること 21 (4.8)	
中学生	139 (30.8)	お金 49 (10.8)	値段 29 (6.4)	高価な物・高級品 23 (5.1)	大切なもの 20 (4.4)	生命 18 (4.0)	
大学生	20 (32.8)	お金 5 (8.2)	評価するイメージ 5 (8.2)	ポジティブイメージ 4 (6.6)	値段 3 (4.9)	大切なもの 3 (4.9)	
大人	15 (25.9)	大切なもの 4 (6.9)	道徳 3 (5.2)	その他の特別な物 2 (3.4)	かけがえのないもの・こと 2 (3.4)	基準 2 (3.4)	考え 2 (3.4)

注 1：分類した回答（個々の要素に分割したもの）の総数は、小学生 435 件、中学生 452 件、大学生 1 年生 61 件、大人 58 件であった。
注 2：同順位があるため、一部 6 カテゴリーとなっている。

表 3-2　「価値がある」ものの 5 位までの総数および各カテゴリーとその頻度

	5 位までの総数（%）	5 位までの各カテゴリーとその頻度（%）					
小学生	273 (40.0)	お金 76 (11.1)	宝石 57 (8.4)	家族 53 (7.8)	生命 50 (7.3)	友達 37 (5.4)	
中学生	312 (38.0)	友達 77 (9.4)	生命 71 (8.6)	お金 69 (8.4)	家族 69 (8.4)	友情 26 (3.2)	
大学生	49 (32.5)	お金 12 (7.9)	家族 11 (7.3)	友達 11 (7.3)	愛・愛情 5 (3.3)	努力やその成果・過程 5 (3.3)	学び 5 (3.3)
大人	24 (24.7)	家族 6 (6.2)	生命 6 (6.2)	努力やその成果・過程 5 (5.2)	愛・愛情 4 (4.1)	夢 3 (3.1)	

注 1：分類した回答（個々の要素に分割したもの）の総数は、小学生 682 件、中学生 821 件、大学生 1 年生 151 件、大人 97 件であった。
注 2：同順位があるため、一部 6 カテゴリーとなっている。

①「家族」は、小学生、中学生、大学生、大人のいずれにおいても 5 位以内に入っている。
　→価値あるものの共通のイメージのひとつでは？
②「生命」は、大学生を除いて 5 位以内に入っている。大学生においては次点（2.6%）。
　→価値あるものの共通のイメージのひとつでは？
③「愛・愛情」や「努力やその成果・過程」は年齢があがるにつれて変容する。
　→年齢があがるにつれて価値あるものとして認識されていくのでは？
④「友達」と「お金」は大人と小中学生・大学生との間に相違が見られた。
　→年齢があがるにつれて価値あるものとして認識されなくなるのでは？
⑤中学生のみで、「友情」が 5 位以内に入っている。　　（以上、永瀬美帆担当箇所より）

これらから、「家族愛」「生命尊重」をコアとした道徳教育が、子育て支援の核となる価値観の育成につながるのではないかと考えられる。

2.「生命尊重」を核とした道徳授業の結果

（以下、「道徳的価値に気づかせるための伝記教材の開発」（鈴木由美子、宮里智恵他）『広島大学　学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第39号、2011年、pp. 189-194、参照）

（1）研究の概略

「６千人の命のビザ」（杉原幸子・『中学道徳２　明日をひらく』所収）を用いて，小学校５年生，６年生と中学校２年生を対象として道徳の研究授業を行った。

道徳授業において，授業中にワークシートを書かせて，価値観を獲得しているかどうか検討することにした。質問は以下の３問だった。

問１：あなたが杉原千畝だったら，どうしますか。また，それはなぜですか。
問２：なぜ杉原千畝はそうしたのだと思いますか。考えを書きましょう。
問３：今日の学習から，生きていく上でどんなことが大切だと思いましたか。

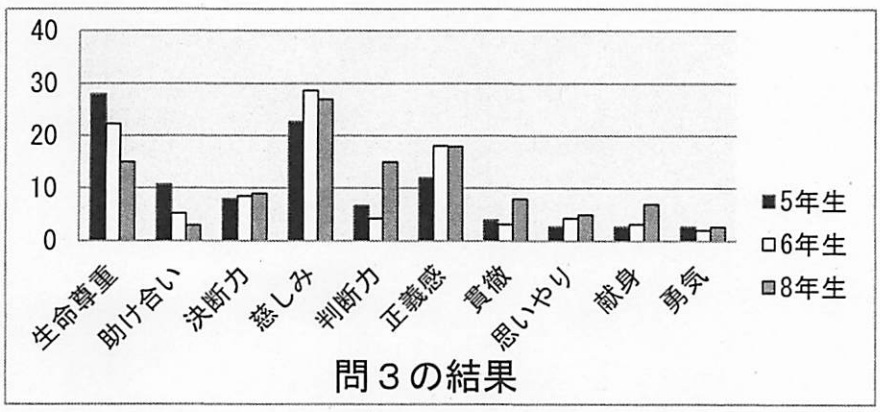
本発表では、問３に書かれた子どもたちの意見を，価値を示す言葉をキーワードとして分類した結果を示す。ひとつの意見に複数の価値が示されている場合は，複数として分類した。

（２）問３の結果

子どもたちの意見をキーワードで分類した。複数回答は複数としてカウントした。総数を学年ごと，キーワードごとに分類し，割合を算出した。基本的には子どもたちが書いている言葉を尊重したが，「自分の命も大切だが相手の命も大切」というように，命の尊さの平等を述べている意見は「慈しみ」とした。同じように平等に着目した意見でも，「同じ人間だ」というように権利の平等に着目した意見は，「正義感」とした。

生命尊重	優しさ
助け合い	忍耐
使命感	尊厳
決断力	愛
慈しみ	人生
判断力	献身
正義感	勇気
覚悟	感謝
貫徹	義務
思いやり	その他

キーワードごとの数を全体で合計し，上位10個を選択した。選択した10個のキーワードを，学年ごとに分類した。その結果は以下の通りである。



学年ごとの違いが顕著に見られるのは，「生命尊重」，「慈しみ」，「正義感」である。「生命尊重」は，５年生よりも８年生の方が少ないのに対し，「慈しみ」と「正義感」は，５年生よりも６年生と８年生で多い。また，数は少ないが，８年生では「判断力」をあげている意見が多い。基本的には，「決断力」と「判断力」の相違は子どもが書いた言葉の相違のままであるが，一般的に決断は「きっぱりときめること」（広辞苑）を指し，判断は「真偽・善悪・美醜などを考え定めること。ある物事について自分の考えをこうだときめること」（広辞苑）を指す。言葉の通りに解釈すれば，８年生では真偽・善悪・美醜を考え定め，自分の考えをきめることを価値あることと捉える子どもが多いといえる。

このことから、価値観獲得の過程において，「生命尊重」が「慈しみ」や「正義感」に分化していると考えられる。鈴木ら（2009）が明らかにしたように，日本の子どもには，誰にとっ

ても公平な価値の獲得が難しい傾向があることが示されていた。これに対し本研究の結果は，誰にとっても公平な価値が，命の平等といった感情的側面から芽生えている可能性を示唆するものである。つまり、「生命尊重」を核として、平等、公平、思いやり、献身などに分化していくのではないかということである。

この仮説に基づいて、2012 年度は「生命尊重」の価値観の分化を確かめるための研究を行っている。現在のところ、「自己の安全」→「一生懸命」（努力）」→「思いやり、使命、感謝など」といった方向性が示されている（未公表）。

まとめ

（1）子育てを核とした新しい社会関係構築において、中心となる価値のひとつとして「生命尊重」があげられる。「生命尊重」はどの世代にも共通する価値についてのイメージのひとつである。

（2）「社会的義務」、「生命尊重」、「家族愛」が論点となる教材を使った道徳授業では、「社会的義務」と「生命尊重」とは葛藤となるが、「家族愛」はほとんど葛藤の根拠にならない。「生命尊重」に比べると「家族愛」は利己的に見えるようである。そうしたことからも、「生命尊重」が核ではないかと考えられる。

（3）「生命尊重」は、自分の身を守る、親のいいつけを守るといった自己保存に関わることから、一生懸命がんばるというように、期待に応える、周りの人のためにがんばるといった他者への思いが含まれてきて、その後、他の人の命も大切にする（思いやり）、与えられた命を生ききる（使命）、周りの人に感謝する（感謝）というように分化するのではないかと予想される。これは、まだ十分解明されていない。

（4）以上から、「生命尊重」を核とした価値観の育成が、子育て支援の根底として必要ではないかと提案したい。詳しい構造化は今後の課題である。

＊本発表は科研費（22531024）の助成を受けた研究の一部である。

参考文献・資料

クライヴ・ベック/山根耕平訳『学校教育の未来－価値教育の視点－』晃洋書房　1995 年
武藤孝典編著『人格・価値教育の新しい発展　日本・アメリカ・イギリス』学文社　2002 年
平野武夫『価値葛藤の場と道徳教育』黎明書房　1967年
鈴木由美子「子どもの対人関係認識の発達に即した道徳的判断力育成プログラムの開発」（平成18-20年度科研費研究成果報告書　研究課題番号18530712　研究代表者：鈴木由美子）2009年
Thomas C. Hennessy, S.J. (Ed.) *Values and Moral Development,* New York, 1976.
『広辞苑』第五版　岩波書店　2005年
『中学道徳２明日をひらく』東京書籍　pp. 87-98.
http://www.valueseducation.edu.au/values（オーストラリアでの values education に関する web サイト）